

郷土博物館だより

令和6年度企画展「新収蔵品展(仮称)」
2024.10/5(土)～11/17(日)(予定)



白田の湯利用案内と
ルームキーホルダー



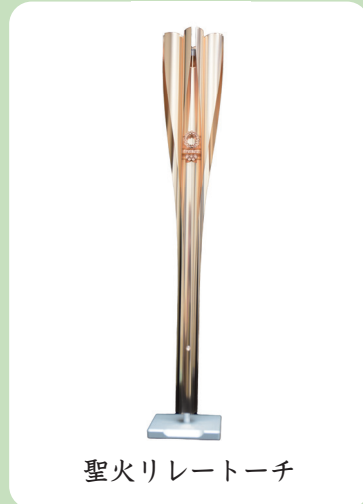
たばこ



兵隊盃



ブリキ製の人形



聖火リレートーチ



メンコ

郷土博物館では、主に戸田に関する歴史・民俗資料を収集しています。これらの資料は、調査・登録・燻蒸を経て、長期間残していけるよう収蔵庫で大事に保管し、展示等で活用しています。

令和3～5年度には、かつて戸田のお店や市の関連施設で使われていたもの、昭和時代のおもちゃ、戦争、スポーツ、生活用具、民俗芸能関係資料等を受け入れました。

そこで本展示では、近年収蔵した資料の一部を紹介します。一例として、令和3年(2021)開催の東京2020オリンピック関係資料(聖火リレートーチ、都市ボランティア用品、ぬいぐるみ等)、丸正洋品店関係資料、昭和30年代に使用されたと思われる紙メンコやブリキ製の人形(鉄人28号)、新曽下町観音経で使われていた太鼓等があります。このほかにも色々な資料が登場しますのでお楽しみに。

◆目次

博物館授業報告……………	2	令和5年度昔のくらし展レビュー……………	6
埋蔵文化財調査……………	3	令和5年度文化財講座、アーカイブズ・セミナー……………	7
令和5年度近隣学校連携展示レビュー……………	4	令和5年度講座報告、収蔵庫情報45……………	8
令和5年度企画展レビュー……………	5		



博物館授業報告

郷土博物館では、市内小学校3年生・6年生を対象に博物館授業を行っています。来館による博物館授業は、平成30年からの施設改修工事やその後のコロナ禍の影響により、一時休止していました。令和5年度は、実に6年ぶりとなる来館による対面形式での博物館授業を実施しました。3年生は社会科の「人々のくらしのうつりかわり」に合わせた内容、6年生は歴史の授業のうち「古代」を中心とした内容の博物館授業です。博物館授業では、展示の見学だけでなく、それぞれの学年に合わせて作成した学習サポートを用いての調べ学習や、学芸員やボランティアの指導のもと、体験学習を行います。

5月から6月に実施した小学6年生授業では、「学習サポートを用いた常設展示見学」、「キリモミ式やマイギリ式による火おこし体験」、「黒曜石のナイフの試し切り体験や土器の観察」を行いました。授業の中で特に盛り上がるのはやはり体験型の学習です。火おこしのコツをつかんだ児童は、「限られた時間の中でどうすればうまく火種を起こせるか」を考えながら、火きりぎねを火きり板に押し付けるよう下に向けて力を入れてみたり、早く動かしてみたりと、様々な方法で挑戦をしていました。根気強く、最後まであきらめない姿が印象的でした。

黒曜石のナイフの試し切り体験では、初めて手にする黒曜石のナイフの鋭い刃に注意をしながら、チラシを色々な形に切っていました。その後、学芸員の解説のもと、土器の観察や土器の欠片を触る体験を行いました。



火おこしにちょうせん



黒曜石のナイフの試し切り

令和6年1月から2月に実施した小学3年生授業では、「学習サポートを用いた常設展示・昔のくらし展の見学」、「薬研や石臼でものをすりつぶす体験」を行いました。石臼は、上の石が22キロ、下の石が24.5キロと大変重たいもので、回すのにも一苦労でしたが、上下の臼の隙間から粉になったお米がさらさらと粉雪のように出て無事に成功しました。薬研は、薬草のようにやわらかいものから鹿の角や軽石のようにかたいものまで粉にすることができます。事前に乾燥させてパリパリの状態にしたみかんの皮は、回数を重ねてすりつぶすごとに粉状になっていきます。細かさが変わっていく様子を楽しんだり、「良い香りがする！」と喜んだりなど、児童の楽しそうな様子が印象的でした。



石臼でお米を粉にします



薬研でみかんの皮を粉にします
木製と金属製の2種類の薬研を体験しました

埋蔵文化財調査

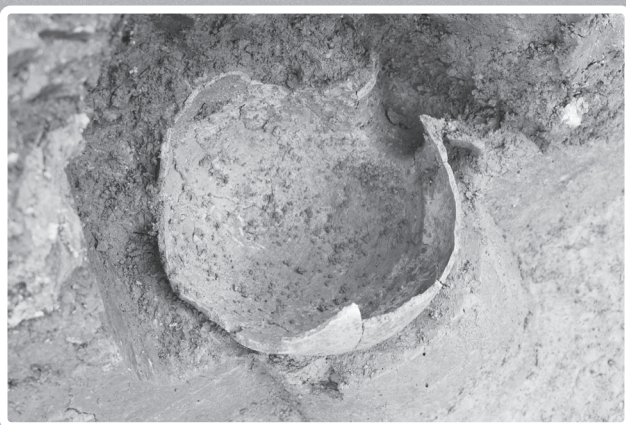
郷土博物館では、埋蔵文化財包蔵地内で開発が行われる際に事前に埋蔵文化財発掘調査を行っています。令和5年度は戸田市南町にある南原遺跡^{みなみはら}で第14次の発掘調査を行いました。

南原遺跡は、弥生時代から近世までの遺構・遺物が確認されている複合遺跡です。第14次調査では、今から1600年から1700年前の古墳時代前期の^{たてあな}堅穴建物跡1基、^{しゅうこうじょういこう}周溝状遺構2基、約1100年前の平安時代の溝状遺構1条を検出しました。

このうち周溝状遺構は、溝が方形に掘削された遺構のことで、従来は方形周溝墓と考えられていました。しかし、近年は一部の周溝状遺構は周溝持ち建物跡であることが指摘されるようになってきました。周溝持ち建物跡は溝を方形に掘削することは方形周溝墓と同じですが、周溝の内部を建物とするもので、東海地方や北陸地方の低地遺跡によくみられる住居です。

関東地方にも弥生時代の後期後半に本格的に導入され、低地を開発した人々が用いた住居となっています。このような住居形式を導入した理由については、低地では地下水位が高く、半地下式の堅穴住居を築くことが難しいからではないかと考えられています。ただし、遺構の形から方形周溝墓と周溝持ち建物跡を判断することは難しいため報告書では周溝状遺構としています。

では、今回見つかった周溝状遺構はどちらの遺構なのかというと、第2号周溝状遺構とした遺構は方形周溝墓の可能性が高いと考えています。その理由として、第2号周溝状遺構からは底部が打欠きにより欠損した壺が出土したことです。方形周溝墓で葬送儀礼を行うときに使用された道具は一度しか使用しないため、^{さいし}祭祀後は利用できないように打欠き、方形周溝墓の溝の中に廃棄されました。そのため打欠きされた壺や底部穿孔された土器が出土すると、その遺構は方形周溝墓と考えられています。市内では5世紀後半の古墳からも底部を打欠きした壺が出土しているため、意図的に壺を破損させる行為は古墳の祭祀にもつながる要素となっています。



第2号周溝状遺構出土壺(底部打欠き)



第2号周溝状遺構調査状況

令和5年度

近隣学校連携展示レビュー

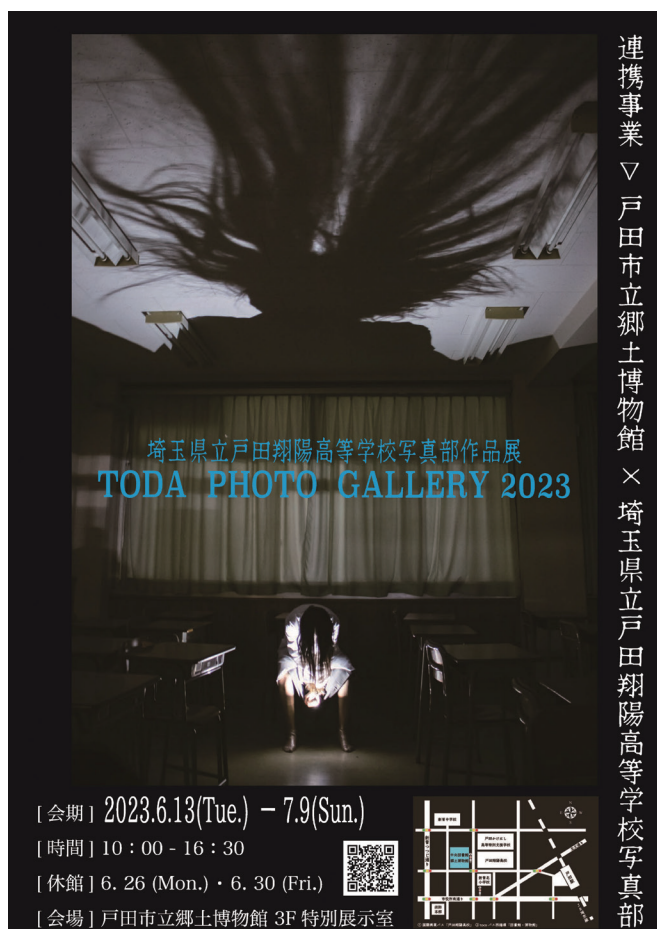
埼玉県立戸田翔陽高等学校写真部作品展 TODA PHOTO GALLERY 2023

2023.6.13(火)～7.9(日)

令和5年度の第一弾の展示として、郷土博物館の近隣にある戸田翔陽高等学校と連携した写真部作品展を開催しました。戸田翔陽高等学校の写真部は、全国高等学校写真選手権大会(写真甲子園)、埼玉県高等学校写真連盟写真展、埼玉県高等学校総合文化祭写真展などの各写真展において実績を上げている部活動です。写真強豪校との連携展示は、郷土博物館にとって初めての試みでした。

今回の展示では、ポスターにあるような学校を舞台としたホラー風の写真のほかにも、都会を彩るイルミネーションや車のライトの写真、鳥がはばたく瞬間の写真、厳かな海辺の写真など数多くの写真を展示しました。展示室内中央には、写真甲子園の賞状や、生徒の集合写真や色紙の寄せ書きなど、普段の写真部の活躍が見られる資料も展示しました。また、図書館との連携により、中央図書館と図書館上戸田分館には、写真展にちなんで、写真関連書籍を紹介する特設コーナーを設置しました。

今後の戸田翔陽高等学校写真部の活動や作品制作の参考とするため、コメントカードを設置したところ、会期中64枚のカードが寄せられ、作品や作者である写真部生徒への好意的な感想やメッセージが多く見られました。来場者の多くはじっくりと丁寧に時間をかけて作品を鑑賞しており、小学生から年配層まで幅広い年代の来場者が訪れました。



写真展ポスター



展示会場風景



写真関連書籍を紹介する
図書館上戸田分館特設コーナー

第29回企画展 戸田市所蔵絵画展

2023.10.14(土)～11.19(日)



戸田市では、主に昭和40年代中頃から平成の初め頃にかけて、洋画、日本画、版画など様々な絵画を収集し、所蔵しています。本企画展では、それら市所蔵絵画の中から「浦和画家*」をはじめとする埼玉にゆかりのある画家や著名な画家を選定し、展示を行いました。今回展示した市所蔵絵画の中には、浦和画家と称された金子徳衛、川村親光、小松崎邦雄、斎藤三郎、高田誠の作品があります。あわせて、絹谷幸二、宇野亞喜良、三栖右嗣、丸木俊などの著名な画家の作品も展示しました。宇野亞喜良作「春」は、当館1階ロビーに複製の陶板画を展示していますが、今回の絵画展で原画を展示したことで、より興味を持って鑑賞されている方もいらっしゃいました。また、アート系の展示にちなみ、中央図書館ホームページでは関連書籍の紹介、図書館上戸田分館では芸術関連書籍を紹介する特設コーナーが設置されました。

展示会場に設置したアンケートコーナーでは、会期中88枚のアンケートが寄せられ、「市所蔵の絵画がこれだけあるのを知らなかった」「浦和画家を初めて知ることができました」という気づきの声や、「美術館のない戸田なのでこのような絵画の企画をこれからもお願いしたい」といった好評の声を数多くいただくことができました。



*浦和画家とは・・・

大正12年(1923)に起きた関東大震災以降、埼玉県北足立郡浦和町(現さいたま市浦和区)の鹿島台と呼ばれた地域には被災した東京などから多くの芸術家たちが移り住みました。のちに、鹿島台や別所沼のほとりに住宅やアトリエを構えて芸術活動を行った芸術家たちを総称して、「浦和画家(浦和絵描き)」という言葉が広まっていきました。



展示会場風景



展示会場風景



展示会場風景

芸術関連書籍を紹介する
図書館上戸田分館特設コーナー

土間空間壁面の製作

このレビューでは、少し趣向を変えて展示の裏側をご紹介します。小学3年生の社会科の学習「人々のくらしのうつりかわり」に合わせて開催している「昔のくらし展」ですが、令和5年度は展示を構成する土間空間の壁面(以下、壁面)を20数年ぶりに新しく造り直しました。製作に当たっては、博物館側から「耐久性があり長年繰り返し使えること。常設展示室内の復元民家内と同じようなイメージや色合いで仕上げしてほしい」と要望を出し、図面を見ながら製作者と打合せを重ね、修正も行いました。

そうして迎えた設営初日は、あわせて7人の業者さん・職人さんが作業に入りました。まずは古い壁面に使用していた部材を廃棄するため、特別展示室の奥にある倉庫から搬出を行います。その後、新たに製作する壁面の部材を特別展示室に搬入し、図面に従ってそれぞれの部材が所定の場所に配置されます。配置され組み立てる準備が整った部材は、職人さんが端の方から固定していきます。作業は壁面を組み立てて終了ではありません。組み立て終わった壁面は木の板がむき出しの状態ですので、「土壁らしくする」ために経師貼りの作業を行います。経師貼りとは、壁の部分一つ一つの大きさを測りながら丁寧に壁紙を切り、貼り付けていく作業のことです。この作業を何度も繰り返したのち、初日の作業は終了しました。



大工さんによる組立(初日)



大工さんによる組立(初日)



経師貼り(初日)



スプレーガンでの塗装(2日目)



製作直後の壁面(2日目)

設営2日目は壁面の塗装作業で、あわせて3人の業者さん・職人さんが作業に入りました。あらかじめ汚れや古びた風合いの加工を施した部材を準備して組み立てるのではなく、綺麗な状態で組み立てた壁面に「年月が経った土間の土壁らしさ」を出すため、汚れや古びた風合いにする塗装作業を現場で行います。塗装をするのに当たっては、まず周囲の塗料が付いてはいけない箇所を養生します。その後、職人さんが調合した塗料を、スプレーガンを使って霧状に噴射し、壁面全体に塗装を施します。はじめは薄めの色で、徐々にそれぞれの箇所の汚れや古びた具合の表現に応じて色に濃淡を付けていきます。特に、かまどが置かれた壁面はすでに黒く汚れた状態になるため、その部分を強く塗装していただきました。このような作業を「エイジング加工」といいます。

こうして仕上がった壁面を皆さんはご覧いただけましたか?じっくりと見ていない、気づかなかった…などと思われた方もいらっしゃるかと思います。実は昔のくらし展は毎年1月～3月に行われる展示ですので、今回ご紹介した壁面は来年以降も展示で繰り返し使用します。少し期間は空きますが、次回の昔のくらし展でご覧いただくことができますので、機会がありましたらぜひ郷土博物館までお越しください。お待ちしております。

令和5年度文化財講座

2023.11.12(日)・11.19(日)

令和5年度文化財講座として、笹目コースの文化財をめぐる文化財街歩きと、文化財講座「文化財の保存と修理」を11月に開催しました。

文化財街歩きでは、通常非公開の市指定文化財「笹目神社神馬」^{しんめ}、圃中公園^{はたけなか}にある「宝暦の庚申塔」^{こうしんとう}、大正時代に大きく賑わった梅の木稲荷などをめぐり笹目地区の文化財と歴史について学びました。

文化財講座では、株式会社上田墨縄堂^{ぼくじょう}代表取締役上田誠氏を講師に迎え、令和2年度に行った笹目神社神馬の修理を中心に、文化財の修理についての講座を行いました。古文書や陶磁器など様々な文化財をどのように修理するかを学び、文化財の重要性を再認識しました。



笹目神社



平等寺

令和5年度アーカイブズ・セミナー

2023.12.2(土)・12.9(土)

令和5年度アーカイブズ・セミナーとして、「戸田の古文書を読んでみよう 初級編」を12月に開催しました。郷土博物館2階には、アーカイブズ・センターが設置されています。今回の講座では同センターが所蔵する古文書の中から検地帳や年貢割付状^{ねんぐわりつけじょう}などを取り上げ、古文書に書かれている内容や、人の名前、数字の読み方について学びました。くずし字を読めるようになりたいという方はとても多く、30代から80代の幅広い年齢層の方にご参加いただきました。講師からの「これは何と読むでしょう？」という問いかけに対し、「〇〇ではないか」と多くの声上がり、熱心に受講されている様子が伺えました。



アーカイブズ・セミナーの様子

令和5年度講座報告

郷土博物館では、講座参加者が楽しく体験できるように、教える側の博物館職員も練習しその都度やりかたを見直しています。令和5年度の「子ども体験ひろば」は、4日間計6回実施し、火おこし体験と昔の道具体験を行いました。10月開催の「火おこしにしようせん」では、摩擦の力を利用したキリモミ式・マイギリ式・ヒモギリ式の3種類に挑戦してもらいました。ホギの種類(アジサイとヒノキ)を変えることで煙や火種の発生率に変化があるかを検証し、参加者全員がマイギリ式で煙を起こすことができました。次は参加者全員が煙の次の段階である火種を起こすことが目標です。昔の道具体験は2回行い、2月の講座では、収穫した稲を脱穀するところから精米するまでを、昔の道具と現在ある道具を使って楽しく体験しました。3月の講座では、薬研と石臼でものをすりつぶし、糸車で糸を紡ぐ体験をしました。体験用の道具は数年ぶりに使うものもあるので、傷んでいるところがないかなど、日々状態の確認やメンテナンスを行っています。



火おこし体験(マイギリ式)

収蔵庫情報.....〈45〉

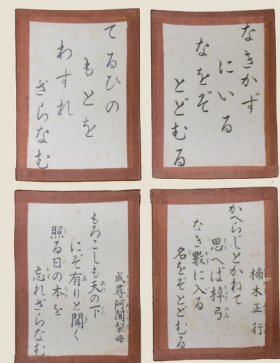
あいこくひやくにんいっしゅ 愛 国 百 人 一 首

愛国百人一首は、昭和17年(1942)に日本文学報国会という団体が企画し、当時の軍部や内閣直属の情報局などが支援して、毎日新聞社から発行されたかるたです。古代から幕末までの、天皇への忠誠や国土の美しさなどを歌った和歌が百首選ばれました。選定には、佐佐木信綱・斎藤茂吉・釈道空(折口信夫)・北原白秋など、当時の著名な歌人が参加しています。今回ご紹介する愛国百人一首は、絵の描かれていない文字札だけのかるたですが、当館では絵札のある版も所蔵しています。

当時の日本は太平洋戦争に突入しており、発行の背景には、国民の戦意と国家への忠誠心を高めたい政府の思惑もありました。一方で、小倉百人一首と同じ競技かるたとして遊んだという証言もあり、対戦用の「早取り法」解説も残っています。発売期間は終戦までのわずか3年弱でしたが、広く普及しており、国民は制作側の意図と異なる形で、かるたを楽しんでいたのかも知れません。



愛国百人一首・箱



愛国百人一首・札



郷土博物館だより 第50号

■発行：令和6年3月27日 ■編集・発行：戸田市立郷土博物館

〒335-0021 埼玉県戸田市大字新曽1707番地 TEL 048-443-5600 FAX 048-442-8988

URL <https://www.city.toda.saitama.jp/soshiki/377/> E-mail hakubutu@city.toda.saitama.jp

■印刷／(有)宮園印刷